

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



亀が森冒険遊び場のターザンロープ

## 特集 地域でつくる 子どもの遊び場

### ● 子どもの遊び場は地域の遊び場 ③

亀が森冒険遊び場 (宮城県石巻市)

### ● 子どもの笑顔は暮らしづくりの第一歩 ⑤

市民活動団体 みんな共和国 (福島県南相馬市)

### ● 子どもを見守る商店街 ⑦

みなみまち cadocco (宮城県気仙沼市)

### ☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント ⑧

(大正大学人間環境学科こどもコース 教授 西郷泰之さん)

「東日本大震災・おらいの地域の元気興し  
第1回いがす大賞」  
募集要項を挟みこみました

### 東北の元気⑩ ⑨

大町ほほえむスクエア (岩手県釜石市)

### まちの仕組み⑪ ⑩

就労支援で被災者の暮らしを支える (宮城県仙台市)

### 被災経験のある地域からのメッセージ③ ⑫

過去の経験を東北で活かす (兵庫県)

### 防ごう！生活不活発病④ ⑭

発見は生活動作の困難から  
(国立長寿医療研究センター部長 大川弥生さん)

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

ひとりごと サポーターのあなたへ④  
(宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザー 浜上章さん)

### 生きがい仕事⑧ ⑯

閉上の記憶 (宮城県名取市)

# 地域でつくる

# 子どもの遊び場

特集

子どもたちの元気な笑い声を聞くと  
なんだかうれしくなる。  
子どもたちの笑った顔を見ると  
ついつい微笑んでしまう。

しかし、東日本大震災によって、  
子どもたちを取り巻く環境はがらりと変わってしまいました。  
今回の特集で紹介しているのは、  
“子どもたちの笑顔を取り戻そう”  
その想いを胸に、活動を始めた人たちです。

宮城県石巻市に暮らしていた阿部正樹さんは、  
はじめての土地に避難してきた子どもたちになにかできないかと、  
“大人も遊ぶ” 遊び場づくりを始めました。  
福島県南相馬市では、子どもたちが思いっきり遊べる環境をつくろうと  
市民たちが結集！

市民による遊び場づくりは、多くの感動を与えています。  
宮城県気仙沼市では、市青年部のメンバーたちが、  
津波によって失われた子どもたちの居場所をつくりあげました。

「子どもたちが遊びまわっている姿って、いいよね」  
子どもは地域のパワーの源



流しゾーメンもやりました！

# 子どもの遊び場は地域の遊び場

◎亀が森冒険遊び場（宮城県石巻市）

## ポイント

1. 子どもも大人も「遊び」は心の解放と仲間づくり。みんなが一緒に楽しむ「遊び場」をつくろう。
2. 遊び場づくりの第一歩は仲間づくりから。“やってみたい”ことは口に出して仲間を募ろう。

### 子どもたちに遊び場を

宮城県石巻市河北地区。北上川が流れ、山々が広がる自然豊かなその土地は、地域の子どもたちが遊ぶにはなんの不自由もない場所だった。

「地元の子どもたちはたくさん遊び場を知っている。でも、避難所に暮らす子どもたちにとって、ここは見知らぬ土地。遊ぶ場所がどこにあるかわからなかったと思うんです」。そう話すのは、亀が森地元有志の会代表の阿部正樹さん。東日本大震災発災直後、阿部さんが暮らす河北地区では、地元の小学校と中学校、市の総合センターが避難所になった。さまざまな地域から避難してきた人たち。当然、河北地区を知る人ばかりではない。大人も子どもも窮屈な生活を送らざるをえなかった。

その様子を間近で見た阿部さんが気にかかったのは、避難所で生活する子どもたちのこと。「自分でできることはなんだろうって考えたとき、子どもたちが自由に駆け回って遊べる場

所をつくることを思いたちました」。阿部さんは宮城県仙台市で子どもたちの遊び場づくりを実践する、西公園プレーパークの会の理事を務めている。活動の経験を地元でも生かせるのではないかと、そう感じた。また、阪神・淡路大震災のときにボランティア活動をしていた知人から聞いた、「子どもたちのこころのケアには遊びが重要」という言葉も阿部さんの背中を押した。やることは決まった。遊び場づくりの始まりだ。

### 遊んでみよう会

まずは場所の選定から。避難所から歩いて行ける範囲で、子どもたちが思いっきり身体を動かせる広さがあるところ……。試行錯誤を重ねながら探したところ、条件に当てはまる場所が見つかった。亀が森公園だ。さっそく市と地主さんに交渉。快く了承してもらうことができた。阿部さんから話を聞いた西公園プレーパークのメンバーたちも駆けつけ、2011年5月に公園を視察。翌月に、



## 亀が森地元有志の会 代表 阿部 正樹さん

「まずは声をあげることがたいせつ。  
みんながいるからできる！」

メンバーが実際に遊び、もともと公園にあった遊具の安全性や危険箇所がないかを確認した。手つかずになっていた公園だったため、草刈りも実施。準備が整った。

2011年7月、ついに子どもたちを呼んで、「亀が森公園で遊んでみよう会」を開催。避難所にチラシを配布したところ、たくさん親子が集まった。木と木の間にロープをくくりつけてのロープ遊びや鬼ごっこ、看板づくり。遊びを全身で楽しむ子どもたちは皆、はじけんばかりの笑顔。遊び場に招待していた、太鼓や獅子舞を披露する団体「宮音座」の奏でる笛や太鼓の音色が、公園の外にまで響き渡る。その音を頼りに近隣に暮らす住民たちも集まり、大人も子どもも、避難所に暮らす人も地域の人も、みんなが入り混じった会になった。

### 大人も遊んでいます

会を重ねるごとに子どもたちから「やってみたい！」の声が多く聞かれるように



ちょっとつまみ食い

なり、遊びのバリエーションも豊富に。2012年4月からは、「亀が森冒険遊び場」と名前を変えた。毎月作成している冒険遊び場の予定表には、10時から16時までと書かれているが、気がつくと19時まで遊んでいるときも。子どもだけではない。ここに集まるみんなが遊びに夢中だ。活動にずっとかかわっている西公園プレーパークのメンバーの佐々木啓子さんは、「遊びで元気になったのは子どもだけじゃないよね。阿部くんを見ていても、笑顔が多くなっていった。それがすごくうれしかった。遊び場に来ている人たちみんながそうなんだよね」と、

当時を振り返りながら話してくれた。

公園の山道子どもたちが走り回っているため、近くを通りかかった人たちがびっくりするのではないかと、「子どもたちが遊んでいます」という看板をたてようという話が出たことがあった。その際に、その場にいた子どもが「それよりさ、大人も遊んでいまして、書いてほしい方がいいじゃん！ そうしたら大人も遊びに来るでしょう」と一言。

「なるほどな、と。子どもの発想はやっぱりすごい」と、微笑む阿部さん。子どもたちにとつてこの場所は、子どもも大人も関係なく、みんなが一緒に楽し



段ボールからなにができるかな



看板ももちろん手づくり

遊び場づくりには、仲間づくりが重要だと阿部さんは話す。「こういうことがやりたいんだけど…って、まずは声をあげることがたいせつ。でも自分一人ではできなかった。みんながいるからできるんだと思うんです」。

今後、地域の協力を得ながら、息の長い活動をしていきたいと阿部さん。子どもたちが大きくなったとき、亀が森冒険遊び場のスタッフになり、地域の遊び場として根づいていたら…と、メンバーたちは思いを馳せる。

管



完成したじゃぶじゃぶ池で遊ぶ子どもたち

## 子どもの笑顔は暮らしづくりの第一歩

◎市民活動団体 みんな共和国（福島県南相馬市）

### ポイント

1. “自分たちができること・自分たちだからできることを”を出し合い、積み重ねていくことが、自分たちらしいまちづくりの第一歩に。
2. 子どもの笑顔と感動をみんなで共有！ 子どもの笑顔は地域の元気の源！

じゃあ、つくろうよ

「子どもたちを思いっきり遊ばせたい」。始まりはお父さんたちのその一言。

2012年2月に福島県南相馬市にある南相馬市民文化会館で開催された、南相馬ダイアログフェスティバル。東日本大震災以後、まちの復興を目指し活動を続けてきた団体・個人それぞれの思いを共有する場をつくるうと、市民の声かけにより企画されたイベントだ。そこで設けられた対話の場の一つが、同市に暮らすお父さん同士が話し合う「お父さん会議」。公園があっても外では遊べない。家の近くで遊ばせてあげたい。原発事故の影響によって変わってしまった子どもたちの現状が、お父さんたちの口からあふれ出た。そのとき、参加していた男性たちが声を上げた。「じゃあ、つくろうよ」。

さっそく市へ交渉に。市のバックアップを受け、福島第一原発から30km圏外の鹿島区にある室内ホール、万葉ふれあいセンターを春休み期間中、全館無料で借りることができた。ホールには竹や材木を組んでやぐらを制作。大人も楽しめるようにと、語り場やお茶飲み場も用意した。「ここからみんなでまちづくりを始めよう。そういう気持ちを込めて、みんな共和国」という遊び場にしたんですよ」と話す、みんな共和国国王の高橋慶さん。遊び場の名前はのちに団体名に。メンバーも徐々に増えていった。活動を知ったさまざまな団体の協力もあり、ワークシヨップも開催することに。ここまでの準備期間はたったの20日間。恐るべし市民の力。

そして迎えた春休み。同年3月25日からの15日間、万葉ふれあいセンターに広がる、子どもたちの笑顔。センター内のどの部屋からも聞こえる笑い声。子ども心を忘れていない大人たちのはしゃぐ声も響き渡っている。延べ3,441人が来国。好評だった遊び場は、ゴールデンウィークにも開催された。

大好評だった遊び場だが、訪れたお母さんたちから、こんな声が出た。「夏



市民活動団体 みんな共和国

国王 高橋 慶さん(左)

じゃぶじゃぶ池企画責任者 近藤 能之<sup>よしゆき</sup>さん(右)

「感動ってね、みんなで共有すると  
ものすごいパワーになるんだよ」

には外でも遊ばせたいね。もちろん、子どもたちも同じ気持ちを抱えている。みんな共和国、次のステージの始まりだ。

市民が「安心」をつくる

外で遊ぶために重要なのは安心であること。市の担当者とも話し合い、市内にある防災公園「高見公園」を遊び場にする。公園はすでに市が除染をして

いたが、当時は誰も遊んでいなかった。外で遊ぶことにみんな不安だったのだ。

それならみんなで除染して、自分たちの目で安心を確認しようよ。みんな共和国のメンバーが呼びかけ、市民による公園の除染・クリーン作戦を実施。国の示す安全基準以下の線量に下げることができた。

よし、夏休みはここで遊ぼう！

2012年の夏、キラキラと輝く太陽のもと、子どもたちは太陽の光にも負けない笑顔で公園を駆けまわった。遊具のない公園だったため、手づくりのやぐらや滑り台の下にビニ-

ールプールを置いた、ウォータースライダーなどを設置。もちろん子どもたちは大喜びだ。最初は外から見ている人たちも、元気に遊ぶ姿に誘われ、すぐに公園はいっぱいに。イベントのときだけではなく、毎日遊べる公園にしたいと、同年10月には企業からの助成金と寄贈により、大人向けの健康遊具を含めた24個の遊具を設置。年齢問わず楽しめる公園へと姿を変えた。

思いが感動を生む

2013年7月、みんな共和国は水道循環式の常設水辺「じゃぶじゃぶ池」を公園に設置した。直径約16m。水深は約15cmのため、小さな子どもも安心して遊ぶことができる。設置には制作メーカーが全面的に協力したほか、思いに賛同した全国の人たちが資金づくりに力を貸してくれた。完成したじゃぶじゃぶ池で水遊びを身体いっぱい楽しむ子どもたち。はじめて会う子ども同士も、いつの間にか友達たちになっている。お会いしたお母さんが、

「この子は生まれてから今日はじめて水遊びをしたんです。震災があつてから思いつきり遊ばせてあげられないことに、私自身、これでいいのかな」って気持ちがあつただけで、ここで育ててよかったって、今すごく感じた」と、話してくれた言葉が印象的だった。みんな共和国のメンバーであり、企画責任者の近藤能之さんは、「私たちは思いを集めている。思いが集まることで感動が生まれる。感動ってね、みんなで共有するものすごいパワーになるんだよ」と、目頭を熱くする。その言葉はまさに今の南相馬市そのもの。市民が集めたたくさんの思い。そ



じゃぶじゃぶ池の噴水に子どもたちは大興奮

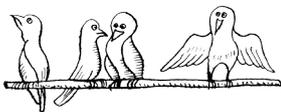
れは確かに多くの人の心に感動を与えていた。

市民の強い思いは子どもたちを元気にし、子どもたちの笑顔はまちを活気づけている。じゃぶじゃぶ池に集まった、たくさんの笑顔を見たとき、みんな共和国は「遊べる場所」だけではなく、安心と感動が生まれる場所をつくつたのだと感じた。一人ひとりがお互いのことを、まちのことを思う気持ちが積み重ねられ、まちに彩りが加えられていく。みんな共和国に集結した思いは、これからの南相馬市の暮らしをつくりだしている。

管



じゃぶじゃぶ池のオープニングセレモニーでは訪れた人全員でテープカットを実施



奥の窓をご覧ください！地域の人たちが外から見守っています！

# 子どもを見守る商店街

◎みなみまち cadocco (宮城県気仙沼市)

## ポイント

1. 地域住民の見守りが子どもの安心。大人が行き来する地域の拠点発掘が子どもの居場所にもなる！

### 子どもたちの居場所

気仙沼漁港から歩いて数分の場所にある、復興商店街南町紫市場。さまざまな店舗が軒を連ねる商店街の一角に、茶色い建物が建っている。道路に面した部分はガラス窓になっており、広々とした室内を見渡せる。奥にある壁は一面黒板。そこには子どもが書いたのではないかと思われる、「宿題明日提出！」という文字。室内で楽しそうに遊ぶ子どもたちを、商店街の店員や通行する住民たちが目を細めて見守っている。震災で集う場を失われた子どもたちの貴重な居場所、それが、みなみまち cadocco (以下、cadocco) だ。

### 商店街とともに再起へ

cadoccoの建つ宮城県気仙沼市南町地区。海に近接する場所にあるため、東日本大震災の津波により、地区全体が壊滅的な被害を受けた。震災前は約160店舗あった

た商店も、その9割が倒壊。多くの人が商店街の再起は難しいだろうと感じていた。しかし、商店主たちはあきらめなかった。「この場所でもう一度商売をすることに、無理だろうと思う人はいたかもしれない。それでも私たちはこのまちが好きだから。やってみようと思った」そう語るのは、南町柏崎青年会(以下、青年会)の坂本正人さん。避難所で青年会メンバーたちと再起に向けての話し合いを重ねた。

商店街の復活に向け青空市を開催、仮設商店街発足の動きがすすむなど、着実に前進していくなか、ふと気になることがあった。子どもたちは今、どこで遊んでいるんだろう。気仙沼市は、古くから子どもによる伝統芸能が盛んな地域。太鼓や劇団、ダンスなど、活発に行われていた。しかしその練習場所も津波によってなくなっている。さらには、子どもたちの家は避難所や仮設住宅に移り、近くに暮らしていた友だ

ち同士が離れ離れに。避難所や仮設住宅も、遊べるような状況ではない。また、空き地のほとんどが干潟<sup>がた</sup>になっていった。遊ぶ場所がない。

そのとき、一つのアイデアが湧き上がった。商店街に子どもが集まる場所があってもいいんじゃないか。商店街の再開と子どもたちの遊び場づくり。その二つがつながった。仮設商店街の建設を予定していた隣接地に、倒壊を免れた建物があり、そこを借りることに。建物の修繕には震災支援活動を続けていたセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが協力。青年会との共同事業という形で立ち上げに手を貸してくれた。

大人も子どもも一緒に

2011年12月、caddocoは復興商店街南町紫市場と同時にオープンした。「住まいが離れてしまった子たちも自転車です」と坂本さん。子どもたちに再び集いの場が

できた。9時から19時の間鍵を開けており、自由に出入りできるほか、伝統芸能の練習や地域住民のサークル活動の場、市内外から団体を招いてのワークショップの開催場所としても使われている。

以前、劇団に入っている子どもから、学校の窓に姿を映して練習しているという話を聞き、室内には鏡張りの壁も設置した。商店街でピアノ教室を開いている遠藤久美子さんは、「なんにでも使える場所。今度ここでピアノのおさらい会もするんです。ワークショップも気仙沼では見られないようなものを見る機会になっているので、すごくいい刺激になっていっていると思います」と、教えてくれた。

「たくさんの人たちと出会って、日常の生活だけでは感じられないことを感じられる場所になってほしい」。坂本さんの話その願いは、もうすでにcaddocoに芽生え出しているのかもしれない。言

大正大学人間環境学科こどもコース 教授

西郷 泰之 (さいごう・やすゆき)さん



全国社会福祉協議会や東京都板橋区役所などを経て、現在大正大学人間環境学科こどもコース教授。専門は子ども家庭福祉。訪問型子育て支援ボランティア(ホームスタート)の活動をとおして東北3県での子育て家庭支援にかかわる。

専門家に聞く地域づくりのヒント

地域を耕す子どもの遊び場

●遊び場を保障することの意味

大人にとっての遊びはあまり意味のないものかもしれませんが、子どもたちにとって、遊びは教育事業であり社会福祉事業なのです。幼児教育の先駆者である倉橋惣三の言葉を振り返ってみましょう。彼は「子どもにとって遊びほど幸福で貴いものはない。……子どもが遊ぶということは大袈裟に言えば、つまり子どもが生きているということと同じ意味である、といってもいいのです」という言葉を残しています。

今回の特集で紹介されたのは、子どもの遊びの保障に関する取り組みです。阪神・淡路大震災の際、冒険遊び場が運営されたり、世界各地で発生する災害時に、チャイルドフレンドリースペースの設置が重要視されている点から見ても、とても重要な取り組みです。

3つの事例で共通するのは、地域住民の方たちの主体的な取り組みである点です。外部からはたらきかけはあったにせよ、自分たちの地域は自分たちで守り発展させるという、住民としての郷土愛と信念を感じました。まさに住民主体の原則に基づいた実践だと思えます。

●もっともっと屋外へ！

宮城県石巻市の亀が森冒険遊び場は、子どもたちの「やってみよう！」を子どもたちとともに実現する子どもが主役の実践でした。

福島県南相馬市での活動は特筆すべきものです。最初は放射線量への危惧から、屋内の遊び場を創造し、その後屋外での遊び場を創出していく取り組みに、市民たちの力強さを感じます。子どもにとって屋外での遊びは、情緒の安定や心身の発育のためには極めて重要なのです。

宮城県気仙沼市での取り組みも、まちおこしの視点や子どものための地域資源開発の視点からも、とても興味深いものでした。地域の人たちに見守られながら、一方で地域の人たちに元気を与えながらの活動には、高い先駆性が感じられました。活動内容はまさに、子ども主体による民間立の児童館と言えます。

1点期待を申し上げるとすると、屋外での活動への発展です。子どもたちにとっては、屋内での遊びとともに、屋外での遊びも極めてたいせつです。屋外での遊びはダイナミックで、遊び集団が大きく、体力も多く使うことから、子どもの成長にとって不可欠です。子どもにとっての最善の利益を目指す活動に発展することを期待します。

DATA

〒026-0024 岩手県釜石市大町 2-8

営業時間 11:00 ~ 21:00

【釜石キッチンカープロジェクト】

<http://k2cp.jp/>

【釜石復興支援プロジェクト】

<http://www.kamaishien.com/>

10回目

市民リレー

# 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。



岩手県  
釜石市

今回は...

## 大町ほほえむスクエア

◎岩手県釜石市

Writer 元持幸子



さまざまなキッチンカーがずらりと並ぶ

こののぼりが目印!

釜石市のメインストリート沿いにあります

2013年6月2日、震災の爪痕が残る岩手県釜石市の中心商店街に、にぎわい空間「大町ほほえむスクエア」が誕生した。ウッドデッキとキッチンカーがつくり出す新しい形の飲食スポットである。各種キッチンカーが、ローテーションを組み出し、ウッドデッキのスペースでは、イベントも開催されている。

大町ほほえむスクエアは、震災後の釜石市における新たな産業の創出による雇用の確保、地域の活性化を目指す「釜石復興支援プロジェクト」の新たな一事業である。震災後より開始した飲食業「キッチンカープロジェクト」、水産業および加工業における牡蠣養殖業「里海プロジェクト」、商店街復興「大町プロジェクト」のよさを活かし連携を図る、新たな事業として開始された。

プロジェクトリーダー三塚浩之さんは、スクエアの運営を「変化していくまちや人々の状況やニーズに対応し、新たな

釜石中心街のにぎわいを創造し発展させていくことができる場所」と語る。震災から2年が経過し、訪れる人のニーズも商店街の様子も変化している。お金を払って食べたいものを食べる選択肢を増やすことと、中心街のにぎわいづくりはキッチンカーのチームで動くことで対応。一方、キッチンカーの機動性を活用し、住民の身近なところへ出向きサービスを提供していくことも継続。そこでは、多様なニーズを知る機会となっている。

三塚さんは、「まちづくりにはスピードと実行力が必要。NO.1や世界初をめざし、まずは動くことがたいせつ」と、キッチンカーの仲間たちと新たなチャレンジを惜しまない力強さを笑顔で語ってくれた。

人が集まり、情報やチャンスが生まれる中心街のにぎわいづくりは、これからもさまざまなチャレンジで発展して行くことだろう。



# 就労支援で被災者の暮らしを支える

## 宮城県仙台市



### 8割が借上げ民間賃貸住宅

宮城県仙台市では、東日本大震災により3万34棟が全壊し、10万9,608棟が大規模半壊・半壊の被害を受け、また津波により沿岸部4,633ha、約8千世帯が浸水した。現在、市内のプレハブ仮設住宅に1,115世帯(11.3%)、借上げ民間賃貸住宅に8,029世帯(81.4%)、借上げ公営住宅などに724世帯(7.3%)が暮らす(2013年7月1日現在)。

### 生活再建に向けた就労支援

仙台市では、被災者の生活を支援するために、多様な支援体制を敷いている。市の保健師や生活再建支援員(シルバー人材センターが受託)などによる戸別訪問、市社会福祉協議会が運営する「地域支えあいセンター」による借上げ民間賃貸住宅入居者への戸別訪問やサロン活動、絆支援員(一般社団法人パーソナルサポートセンターが受託)による一部のプレハブ仮設住宅・借上げ公営住宅入居者への戸別訪問や見守り活動に加えて、宮城県が配置した宮城復興応援隊がまちおこしをサポートする。

また、仮設住宅で暮らす人などを対象とした就労支援に力を注いでいることも特徴だ。特定非営利活動法人POSSSEと、一般社団法人パーソナルサポートセンター(PSC)の2団体

が仙台市と協働し、それぞれ「お仕事探し応援センター」と就労支援相談センター「わつくわあく」を立ち上げ、いずれも無料で就労相談に応じている。「生活再建のためには就労が欠かせません。就労意欲があるにもかかわらず、さまざまな理由でハローワークなどの専門機関に結びつかない状況にある被災者を支えるための取り組みです」と、仙台市復興事業局生活再建支援室室長の佐藤俊宏さんは話す。

#### ◆就職後もサポート

##### — POSSSE —

若者の労働相談支援の実績をもつ特定非営利活動法人POSSSEでは、主に東日本大震災で被災した人を対象に、スタッフ5人が来所や訪問による相談に応じている。昨年度は71人の相

談にのり、うち18人が就職した。働きたいけれど、持病や障害がある・親の介護や子育て中・市外から避難しているため土地勘がないなどの事情を抱える相談者が多い。働かない理由を「意欲の問題」と片付けずに、就労阻害要因を丁寧にアセスメントして支援を行っている。たとえば土地勘がない公共機関に乗り慣れていない人と一緒に地下鉄に乗る練習をし、資格や技能を身につけたい人には職業訓練制度の活用を促すなど、就職するうえでの課題を一つひとつクリアするお手伝いを行っている。仙台支部代表の渡辺寛人さんは、「仙台市の有効求人倍率は震災前の0.5から1.3に上がりましたが、工事現場での保安職など低賃金で不安定な雇用が拡大しています。私たちの支援は、就労を通じて生活を再建して

#### ◆職場の開拓と職業体験

##### — PSC —

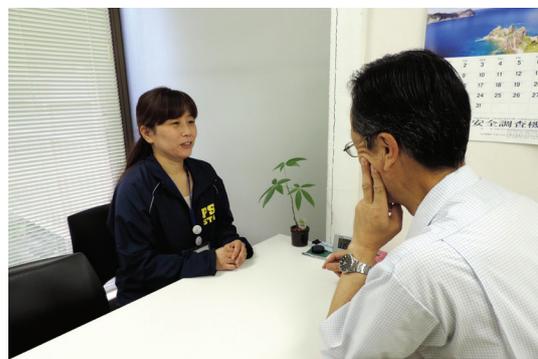
PSCでは、市中心部にある「わつくわあく」や、あすと長町で運営するコ



「お仕事探し応援センター」で相談に対応する渡辺寛人さん

いくことを目的としています。就職してよかったねと喜べない労働環境の職場もあるため、就労後も継続的に相談に応じ、ときには辞めることも選択肢とするサポートも大事だと考えています」と語る。

コミュニティ・ワークサロン「えんがわ」を拠点に、26人のスタッフが企業へのサポートやマッチング、就労体験、トレーニングなどの支援にあたる。昨年度は、相談者209人のうち、86人が就職を決めた。相談者には50～60歳代が多く、障害のある人が25%いたが、スタッフが面談をとおして就労能力を見極め、ふさわしい職場と一緒に考えるところにも、協力企業を掘り起こして丁寧



就労支援相談センター「わっくわあく」での相談受付の様子

にマッチングすることで、パート・アルバイトを含め、4割超が就職を果たした。2012年12月からは、独自に職業体験実習も開始。実習生に奨励金が支

給されるだけでなく、実習生を受け入れた企業にも、一人あたり1日3千円の運営費が支払われる。この実習を経て、4人が就職に結びついた。履歴書の書き方や面接の練習なども行っており、2013年7月からは就労準備支援センター「わあくしよつぷ」を開設して、パソコン講座などのスキルアップや、農作業や封入作業などをとおして働く自信をつけるプログラムを実施している。また、仮設住宅の入居者が軽作業を行い、若干の収入を得る中間就労の場「えんがわ」への参加者は、60歳以上が65%を占め、生活に張り合いをもたらず居場所として定着した。市の復興定期便をとおして被災者に郵送される広報紙「えんがわ通信」の発行や、PSCの生活支援部が担う仮設住宅への個別訪問などが、新規の就労希望者の開拓につながっており、就労支援部長の児島亨さんは、「今後一人ひとりに寄り添った就労支援を心がけていきたい」と話す。



7月に開設された就労準備支援センター「わあくしよつぷ」

### 住宅再建に向けて

生活再建には、就労と合わせて住宅の問題が欠かせない。市の調査によれば、住宅再建に関する被災者の意向は、再建方針有りが約78%、未定・不明が約22%となっている（2013年7月1日現在）。また、市が今年3～4月に実施した復興公営住宅（災害公営住宅）への入居意向調査では、3,566世帯が入居を希望している。復興公営住宅は、市内33か所及び防災集団移転等に対応した戸建て・集合住宅を合わせて3千戸を整備する計画で、今年4月

に完成した仙台市青葉区の「北六番丁復興公営住宅」には、高齢者のみの世帯や障害のある人がいる世帯など、12世帯が優先的に入居した。計画の多くは集合住宅型で抽選入居だが、東部防災集団移転等整備による170戸については、戸建て住宅も整備するほか、津波浸水区域で現地再建が困難な区域の人たちがまとまって入居できる復興公営住宅も検討している。被災地では、慢性的な資材不足に悩んでいるが、今年度整備完了予定の6か所（664戸）については、秋に入居募集を開始して来春の入居を目指したい



市が発行する震災復興・地域かわら版「みらいん」

**DATA**

**お仕事探し応援センター**  
〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町 1-14-20 本町キクタビル6F  
TEL 022-302-3349

**就労支援相談センター「わっくわあく」**  
〒980-0082 宮城県仙台市青葉区二日町 6-6 シャンポール青葉2F  
TEL 022-395-6258

と、仙台市都市整備局公共建築部復興公営住宅室主任の高橋清一さんは話す。前述したPOSSSEとPSCでは、6月より復興公営住宅の建設予定地を巡るバスツアーを共同で開催している。「どこに建つか土地勘がない」という仮設住宅の入居者の声にこたえて企画したもので、参加者から「実際に見ると、地図では全然違う」と喜ばれている。事業の枠組みにとらわれずに、また官民が協働して、被災者が前を向いて歩むための細やかな支援が求められている。 **小**

## 過去の経験を東北で活かす

兵庫県



災害公営住宅の建設・転居が進められている東北。2013年7月、1995年に発生した阪神・淡路大震災での支援者たちが、当時を振り返り、災害公営住宅移行までの段階で発生するであろう課題や支援について話し合うワークショップが行われました。過去の災害での活動事例をおし、これから私たちにできることはなにかを、一緒に考えていきましょう。

## あのととき、

## なにが課題だったか

阪神・淡路大震災を経験した兵庫県では、仮設住宅での生活から復興公営住宅への移行・入居という一連の流れのなかで、さまざまな課題が浮かび上がった。阪神・淡路大震災において被災者支援にあたって



た支援者たちは、それぞれの経験をもとに、課題が浮上した時期を、復興公営住宅への「入居初期」「転居後」といった4つの段階に分け、それぞれの時期にどのような事例が出現したかを整理した。この4つの段階のなかから、「入居初期」と「入居完了期」の事例を紹介する。

## ①復興公営住宅って

どんなところ？

復興公営住宅への入居募集が始まる「入居初期」。住民からは転居への不安を訴える声が多く聞かれた。「仮設住宅の友だちと同じ復興公営住宅で暮らしたい」「抽選に外れたらどう

なるの？」。そうした切実な悩みのなかには、建物に関する不安もあった。復興公営住宅の概要などが書かれた書類が行政から届くものの、記載されている内容を理解することが難しい住民も少なくはない。また、見ず知らずの土地に建設されることも多いため、自分がその場所で暮らすイメージがしにくいといった問題もある。そういった不安の声はあとを絶たなかった。

## ②復興公営住宅での

見守りは？

復興公営住宅での生活が始まった「入居完了期」。復興公営住宅に配置された支援員には住民の情報が届かないという状況に。また、

復興公営住宅に入居が決まった住民からは、仮設住宅でかわっていた支援員に「寂しい」「こんなときどうすれば……」といった相談の電話がかかることもあった。すべての関係がまた一から始まることとなった復興公営住宅での生活。特に支援が必要な人たちにとっては、仮設住宅でのつながりが途絶えたことは大きなダメージとなった。

## 過去の経験、

東北でどう生かす？

「阪神・淡路大震災で起こった課題を東北では繰り返さないでほしい」。当時の支援者たちはそう話す。上記であげた経験は、これから東北でも起こりうること。では、どうしたらその課題を解決できるのか。当時の支援者たちから、次のような提案があがった。

## ①支援員も災害公営住宅を

見に行こう

阪神・淡路大震災のときには、情報サポーターと呼ばれる人たちが復興公営住宅のイメージがつかめない住民たちに、それぞれの復

興公営住宅の特性（立地、間取りなど）を伝える説明会や現地見学会を実施し、好評を得ていた。東北においても、たとえば、仮設住宅の支援員が完成した災害公営住宅に足を運び、建物の構造や周辺環境を住民に伝えることで、住民の不安を軽減できるのではないかとという意見が多くあがっている。伝え方一つをとってみても、皆に同じ話をしていても伝わらないことは多くある。住民一人ひとりのことを一番知っている支援員たちが、災害公

宝塚市社会福祉協議会  
山本 信也さん

復興公営住宅への引っ越しの準備は、経済的な面でも不安を抱える住民がいます。当時は、ボランティアや仮設住宅の支援員などで引っ越しのお手伝いをする旨を個別でお知らせしていました。



営住宅についての必要な情報を必要な住民に伝えることによって、入居への安心感をもたらすことが期待される。

**総括**

住民の一番の理解者は、ずつと寄り添ってきた支援員。災害公営住宅について一緒に考えよう。

**②引き継ぎはみんな**

一緒にいい！

仮に今後建設される災害公営住宅に支援員が配置された場合においても、必ずしも仮設住宅で関係を築いた支援員になるとは限らない。出会ったばかりの人に、すぐには心を開けないもの。支援員自身も住民の情報がある

仮設住宅での支援員に悩みを打ち明ける、といった例があるように、住民にとって仮設住宅で築いた関係は重要なもの。それは支援員とだけではなく、住民同士にも同じことが言える。阪神・淡路大震災ではそういった関係が途絶えないよう、仮設住宅の同窓会をしたのだという。そうし

**総括**

本人も加わって引き継ぎをすることで安心が生まれる

とないのでは、活動に大きな差が出るだろう。このことへの解決方法としてあがったのは、本人も含めた情報共有の場の設置だ。仮設住宅での生活の様子や伝えたいことなど、仮設住宅での支援員から新たな支援員に引き継ぎをすることは、一から関係を築いていくなかでの重要な土台となる。そしてその場に本人も同席することによって、自分のどういった情報が伝わっているのかを知ることができ、本人も安心できるのだ。

た取り組みはぜひ東北でも実践してほしい活動だと感じる。また、「仮設住宅から復興公営住宅へ移ってからは、一度も訪ねることができず、住民につらい思いをさせてしまった。東北では繰り返さないでほしい」と、話してくれた当時の支援員もいた。こうした言葉も、私たちは胸に留めておかなければいけない。「今活動している支援員たちを、災害公営住宅の支援員として継続して雇うべきだ」これは、阪神・淡路大震災での支援者た



**当時・西宮市名塩仮設住宅 専任民生・児童委員 赤石 貞子さん**

身体的・精神的な面で支援が必要な住民に対しては、災害公営住宅に転居先の関係者たちとしっかりと引き継ぎをすることがたいせつです。



**当時・兵庫県明石市地域保健福祉推進室 室長 岡本 弘志さん**

どの災害公営住宅へ入居の申し込みをすればいいか、住民たちはすごく迷うと思います。迷って当たり前なんです。転居にあたりどんなことが不安なのかを個別に伺ったうえで、お答えすることがたいせつです。また、仮設住宅に住んでいる人たちが1番気になるのは、転居した住民たちの生活です。転居先での暮らしをお伝えすることも、住民たちにとって必要な情報なのだと思います。

ちが東北での災害公営住宅の支援に対して皆口をそろえて話した言葉だ。住民たちとの丁寧なかかわりを重ねていった支援員たちが今後も住民の生活を支える役割を担っていくことが望まれる。

**お知らせ**

**「東日本大震災・おらいの地域の元気興し 第1回いがす大賞」**



2011年3月11日に発災した、東日本大震災。震災後、地域にはさまざまな住民活動やつながりが生まれました。あなたの身近にある元気な活動をみんなに発表しませんか？この大会では、地域のいがす（生かす・活かす・かっこいい）取り組みを全国から募集し、発表することによって、素敵な地域活動がひとつの地域だけにとどまらず、多くの地域に広まることを目指しています。自薦・他薦（活動事例の提案）不問。大会当日は、審査員と一般来場者、協賛企業にも投票いただき、「いがす大賞」を決定します。詳しくは本紙に挟み込みました募集要綱をご覧ください。

**日程**  
 日時：2013年12月21日（土）  
 入場料：無料  
 会場：仙台市太白区文化センター（楽楽楽ホール）  
 主催：特定非営利活動法人 全国コミュニティライフサポートセンター

# 防ごう! 生活不活発病

## 第4回 発見は生活動作の困難から

大川 弥生 (おおかわ やよい)

国立長寿医療研究センター部長 医師



生活不活発病では体や頭や心の働き(「心身機能」といいます)のあらゆる機能が低下します。表1に主なものを示していますが、とても全部はあげられません。特徴として大事なものは、表にあげたような一つひとつの心身機能低下の症状が目立つ前に、歩いたり、立ち上がったたり、階段の昇り降りなどの、さまざまな生活動作(日常生活上の動作)

Q:生活不活発病の症状の特徴は?

【プロフィール】 宮城県生活不活発病予防アドバイザー。新潟県中越地震以来、各種災害で現地活動や実態把握を実施。東日本大震災でも発生直後から現在まで、行政への助言指導から住民への指導まで、幅広い支援活動を継続中。生活不活発病研究の第一人者。現在、厚生省社会保障審議会生活機能分類専門委員会委員長。中央防災会議専門委員等を歴任



新刊『動かないと人は病む～生活不活発病とは何か～』(講談社現代新書) 定価:760円(税込)

の困難や、疲れやすさが起こってくることで、これは普通の病気と大きく違います。

Q:生活動作の困難が最初になるのはなぜ?

生活動作は、多くの心身機能から成り立っています。一つひとつの心身機能の低下は僅かでも、多くのものが同時に低下するので、「かけ算」(相乗効果)で、動作の困難が早くから起ってくるのです。

Q:歩行困難も、足の筋力低下だけが問題ではないのですか?

その通りです。筋力だけでなく、心臓や呼吸機能、平衡(バランス)などの、広い範囲の心身機能低下の「かけ算」として、「歩行の低下(歩行困難)」が起こるのです。

全身の機能低下で生活動作が困難になるのですから、何か一つの心身機能が原因だと短絡的に考えない

てください。

これは予防や改善の対策を考える時に、大事な視点です。

Q:認知症のような症状も出るのですか?

生活不活発病には表にあげたように大きく分けて、  
I・全身に影響するもの、  
II・体の一部に起こるもの、  
III・精神や神経の働きに起こるもの、の3種類があります。  
IIの体の一部分のものだけを考えがちですが、実はIの心臓や肺の機能低下による疲れ易さ、IIIのうつ傾向や知的活動低下(一見認知症のように見える)も重要です。

Q:生活動作の不自由さは、本人や家族でも気づきますか?

そうですね。ですから、前号でも述べたように、住民の方々自身に生活不活発病を知っていただくことが大事なことです。

①生活が不活発になって、  
②生活動作の不自由が出てくること  
に気づくことが早期発見の決め手です。

I. 全身に影響するもの	II. 体の一部に起こるもの	III. 精神・神経のはたらきに起こるもの
<ul style="list-style-type: none"> <li>心臓のはたらきの低下</li> <li>呼吸のはたらきの低下</li> <li>起立性低血圧(血圧調節機能低下)</li> <li>胃腸のはたらきの低下                             <ul style="list-style-type: none"> <li>a. 食欲不振</li> <li>b. 便秘</li> </ul> </li> <li>疲れやすさ</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>関節の動きの制限(拘縮)</li> <li>筋力低下・筋萎縮</li> <li>骨萎縮</li> <li>床ずれ(褥瘡)</li> <li>静脈血栓症→肺塞栓症</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知的活動低下</li> <li>感情が鈍くなる</li> <li>周囲への無関心</li> <li>「うつ」状態</li> <li>平衡機能低下</li> </ul> <p style="text-align: right;">など</p>

表1. 心身機能にあらわれる生活不活発病のさまざまな症状

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階  
TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601

## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

サポートセンターでは、さまざまな支援者、専門家と連携して活動しています。今回はその一人を紹介しましょう。

I市の仮設住宅に隣接する診療所の若きMSWのEさんは、仕事に情熱をもって働いています。そして、認知症高齢者の権利擁護において極めて重要である「成年後見制度」の社会化(必要な人が地域で安心して使えること)を目指しています。

被災地でこの制度利用が進んでいません。成年後見制度は、認知症の高齢者が自ら利用に向けてアクションを起こすというものではなく、家族や支援者などが必要性に気づいてこそ制度利用につながります。また、専門性を必要とする相談対応が多く、地域での相談支援体制づくりが求められます。

Eさんは、I市で成年後見制度の仕組みが機能していない状況について悩んでいました。「地元の支援者間で制度利用の促進に向けた連携を」と熱く説く姿は凛としていました。なにかから取りかかるべきか相談を受けましたので、「地域で同じ思いをもつ多様な人財とつながることから始めよう」と助言しました。

成年後見制度には、利用しやすい仕かけづくりが必須です。

制度利用につなげる役割の支援者たちの連携が欠かせませんが、それが思いのほかすすみません。意地悪な私は、「地元が動かないと手伝わない」と言ってしまい、少々後悔しています。若いEさんへの地元関係者の反応は、好意的なものではなかったはずですが、Eさんに伝えたい。成年後見制度を回す仕かけをつくらうと思った瞬間から、Eさんの思いは一歩叶う、と。時間や労力がかかろうとも、実現のために動き出したEさんを止めることのできる人はいない。このことを、きちんと向かい合って伝えることを私は忘れていました。

このような仕組みづくりに取り組んでいる他地域では、必ずと言ってよいほど実りある状況ができています。地域の実情に沿って、確実に理解者を広げていくことこそが、実現に向けての王道です。制度は行政主体で利用するものではなく、Eさんたちのような地道な活動が作り出すものだと確信しています。被災者支援と復興後を見据えた活動をサポートしていくことも、私の役割と思っています。若い人に触発されるのは、なによりも老化防止につながります。では、また！

## 分野別研修I

震災後の子ども・家族へのサポートと支援における「つなぎ方」について学ぶ

【石巻会場】

8月23日(金) 石巻市ささえあい総括センター

# ひとりごと

## 支援目標の設定を考える②

サポーターのあなたへ！

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上章



浜上章からのメッセージ(ひとりごと)は、被災地にかかわるなかで日々思い、感じたことを思いつくまま表現し、書いたものです。サポーターの皆さんに少しでもお役に立つことがあればうれしいです。

支援目標をどこに置くか？ これは、平時および被災者への個別支援でも、地域支援でもとても重要なことであると思っています。たとえば、個別支援で言うと、安否確認、元気で過ごされているか、体調を悪くしていないか？ 生活に支障をきたしていないか？ など、いわば安心、安全の確保が支援目標とされている場合、訪問による支援の視点も、把握する課題も、その点に照らして問題はないかどうか？ ということになります。次に、人とのつながりや友だち、地域社会との関係性の支援を支援目標とすれば、その点に照らしての視点でかわり、課題を引き出し、支援を考えることになります。さらに、その人の生きがいや役割づくりを支援目標にした場合、その人の過去の経験や趣味、今の関心ごとにも視点をもって聴き出し、その人の思いが少しでも叶うような支援を行うこととなります。

訪問して、特に変わったことがなく「問題なし」と見えることでも、支援目標のレベルを少し上げたところで見直すと、違った課題が明らかになります。仮設住宅での生活が長引くなか、震災前には畑仕事や老人会のお世話をし、得意な漬け物をつくって近所におす

そ分けしていた人が、なにもすることがなく次第に身体が弱り、気持ちも落ち込み、部屋に閉じこもりがちといった場合、安否確認の支援では特に問題がないため放置されがちですが、心身の機能低下や孤立、生きがい喪失という大きな問題状況が見えます。

生きがいや役割づくりを本人と一緒に考え、作り出すことができれば、心も身体も元気になっていきます。支援目標をできる限り高く設定し、可能な範囲でその人の願いを実現できるよう、本人の力を引き出すように支援すると、ストレスが溜まりやすい仮設住宅の生活も生きがいのある、楽しいものになると思います。

今一度、各センターの支援目標や各支援員さんの抱えている支援目標を見直してみてもいいかがでしょうか？ 支援する側にも、安否確認中心の役割では得られないやりがいや生まれてくるのではないのでしょうか。

【プロフィール】鳥取県生まれ。兵庫県川西市、兵庫県と大阪府の社会福祉協議会で地域福祉活動の推進や個別支援に携わる。気仙沼市社協災害ボランティアセンターの支援に関わったことが縁で、2012年4月より宮城県サポートセンター支援事務所アドバイザーとして、サポーターの研修等支援にあたっている。



宮城県  
名取市



# ゆりあげ 閑上の記憶

宮城県名取市



## 生きがい仕事

8

それぞれの仕事もつ意味

Writer 矢田海里



震災の日、一緒に避難した愛犬のサラちゃんと



参加無料。5、6人による持ち回り。  
毎週日曜日開催

「その日は中学3年生だった長女の卒業式に参列してました」当時13歳だった息子の公太くんを津波で亡くした丹野祐子さんは、ときに笑顔を交えながら自身の被災体験を話す。震災後、宮城県名取市の閑上中学校前に建てられたプレハブ小屋「閑上の記憶」は、今、語り部の場になっている。

丹野さんの閑上への思いは複雑だ。「娘のことを考えると、閑上に戻って住むことはできませんが、通うことはできます」。震災後、閑上が更地になり、風化も進むなか、丹野さんはかつてこのまちで、たくさんの方が生きていたことを忘れないために、毎日のように訪れている。約30分の語りは、公民館の二階で孤立し、一夜を明かした体験が、爆発するガスボンベや「助けて」という人々の声とともに語られる。

一年前に語り部を始めた頃は、震災の風化を食い止めるために

「原爆ドームやひめゆりの塔の前で語り部をしているおじいちゃん、おばあちゃんのようになりたい」という丹野さん。語り部の場は、被災地とそれ以外の場所をつなぐ以上に、素の自分になれる場所になっていた。

「その日は中学3年生だった長女の卒業式に参列してました」当時13歳だった息子の公太くんを津波で亡くした丹野祐子さんは、ときに笑顔を交えながら自身の被災体験を話す。震災後、宮城県名取市の閑上中学校前に建てられたプレハブ小屋「閑上の記憶」は、今、語り部の場になっている。

一年前に語り部を始めた頃は、震災の風化を食い止めるために

## 購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？  
お知り合いの方へのプレゼントにもご利用ください。

- 購読会員 年3,600円（年12回、送料込み）
  - 支援会員 1口3,600円（年12回、送料込み）
- ご指定いただいた先へ、それぞれ年12回お送りします。指定がない場合は、編集部が選定する被災都道府県・市町村の被災者の生活支援担当課、または社会福祉協議会のほか、全国に避難する被災者を支援する都道府県、市町村の被災者の生活支援または社会福祉協議会に送付いたします。

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

＜お振込先＞ ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号：02260-9-46303  
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、  
①お届け先の住所と②何号からの購読申込みか、支援会員の方は③希望する送付先のあて名、または④「指定なし」と記入してください。

## ☆次号予告 特集「伝える」

### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

- 11号を読んで…
- ・知っている場所が載っていたので、うれしくなりました。記事を読んで、たくさん元気をもらっています。（仙台市・Hさん）
- ・私の地域にも災害公営住宅が建設される予定です。私1人じゃなにもできないと思っていたけど、もしかしたらできることもあるんじゃないか、できることはやりたい、そう感じました。（石巻市・Iさん）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！

TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail joho@clc-japan.com

### 編集後記

子どもたちの笑顔でいっぱいだった今回の取材。「私も子どもがほしいなあ」そんな夢が膨らみました。しかし現実には27歳・独身女子…。まずは婚活からですね。情報紙の感想とともに、未来の旦那様も募集中です♥（菅原）